

## 発言していける, グローバルな, 競争力のある学会に

調査理事 桑原秀夫



最近では社会の ICT 化が加速度的にますます進展しています。新聞にも毎日のように、放送と通信の融合をはじめとして、電話番号のポータビリティ、電力線通信の解禁、Web 2.0、ネットワークの中立性の論議など、本学会の分野に関連する記事が増加しており、かなり技術的と思われるものも時々見受けられます。医療や教育の場での ICT も数年前に絵に描かれていたものが、現実となってきています。現在、意欲的に進められている FTTH の敷設や、高速無線技術などのブロードバンドの普及が進み、また超高精細画像処理技術、大画面の表示装置の低価格化等が進むにつれ、多くの応用分野の開拓が更に加速されるのは確実です。それに伴い、本学会のカバーする分野はそれだけ社会への影響が甚大になっているといえます。本学会の会員は、この分野の技術知識を持ち合わせている人々の集団であり、意見を述べる機会も増えているのではないかとと思いますが、自身の分野を中心に、できればより広い領域で高い見識を持ち、いろいろな機会に周囲に発言していけるよう意識していくことが必要と思います。調査理事に就任して初めて知ったのですが、本学会は、最高裁から、技術のからむ紛争、特に特許の裁判に関して、技術的見地から意見を述べる委員の派遣を依頼されており、各分野での権威の 10 数名の方々に専門委員として出席して頂いています。政府や各種団体のいろいろな委員会へ参加されている方も多いかと思いますし、日常の中でも、自分なりに貢献できそうな場面もあるはずですので、意識を高めていくことが必要と思います。理科離れが喧伝されていますが、子供たちが、面白い理科の話や実験により影響を受けることもかなりあると指摘されています。

また、技術の分野には国境はありません。FTTH のように日本が世界をリードしたものもありますが、Web 2.0 やネットワークの中立性の議論のように米国が先行したものもあり、この分野では、グローバル化は否応なく進展しています。本学会の論文数も英文誌の方が増加していますが、アジア圏からの、また日本に留学している学生による英文投稿が増えているということで、それは喜ばしいことではありますが、一方、国内の日本人からの投稿は相対的に減っており、言語の壁がまだグローバル化を遅らせている面があります。これも国際委員会委員に就任して初めて知ったことですが、本学会は、アジアの各国における支部での関連の学会活動には、活動奨励金をさほど多くはありませんが交付しています。こういった活動を増やしていき、まずアジア圏からでもグローバル化を図っていかないと、本学会の将来は明るいものにはなりません。

発言していく、グローバル化を進めるということは、本学会の競争力を高める、ということにつながります。国内では公益法人制度が見直されようとしていますし、内外の他の学会との競争・協調は増大していくものと思われます。IEEE でも実は同様な議論をしています。工学部の中でも電気離れが指摘されている中で、本学会が継続して発展していくためには、これらのことが重要になっていくものと考えられます。